

[文献] Kim, Changhwan. 2025. "Culture and Immigrant Selectivity in Shaping Asian American Education: Evidence from Historical Census Data." *American Sociological Review*. doi: 10.1177/00031224251325259.

麦山 亮太 (学習院大学)

2025/05/02 Reading Circle for Inequality Studies

序論

背景：移民の子ども (second generation) は、同程度の出身階層であっても、(1) ネイティブの子どもと比べて教育達成が高く、(2) かつ出身階層と教育達成の関連が弱い (出身階層間教育格差が小さい)。これは移民のパラドックス (Immigrant Paradox) として知られている。これは、とりわけアジア系移民の子どもに顕著に見られる傾向である (アジア系アメリカ人の達成のパラドックス Asian American Achievement Paradox; AAAP)¹。

意義：なぜこのパラドックスが生じているのかを理解することは、不利な階層やエスニティの子どもの上昇移動はいかにして可能かを知るうえで理論的に重要であり、またアジア系アメリカ人の人口が21世紀以降ますます増加しているという点でも重要である。

先行研究の問題：既存の AAAP に対する説明として以下の2つが提示されてきた。

1. セレクション (hyper-selectivity)：アメリカに移民としてやってくるのは出身国でも相対的に階層や野心の高い層なので、子どもの教育達成も高くなるとする説明。
2. 文化：出身国から持ち込まれたアジア系の文化 (e.g., 勤勉さ、努力信仰、親の教育期待や圧力、拡大家族) が、教育達成に親和的だとする説明。

上記の説明は、1965年の改正移民法によって出身国別の移民数が撤廃された後、アメリカには従来よりも多くの移民がやって来るようになる過程で提示された説明である。しかし、これらの説明を検証することは容易ではない。なぜなら、移民の大量流入の過程で、アジア系アメリカ人の教育達成は高い (勉強ができる) というステレオタイプが形成され、こうしたステレオタイプによる予言の自己成就が起こっている可能性があるからである。もしこうした予言の自己成就が原因なら、出身国から持ち込まれた文化が原因であるとは言えない。

¹ アジア系移民とはアジアで生まれてアメリカに移り住んだ人を、(第2世代) アジア系アメリカ人とは親がアジア系移民でアメリカで生まれた人を指すものとする。

問い：WWII 以前に流入した移民の子どもの教育達成を分析することによって、アジア系移民の文化が AAAP を生み出しているという説を検証する。WWII 以前のアジア系移民およびアジア系アメリカ人は厳しい差別にさらされており、1965 年以降に生じたステレオタイプは持たれていなかった（戦後から徐々に生じたステレオタイプである）。そのため、出身国から持ち込んだ文化が AAAP の要因であるのかを識別するのに適している。

戦前の AAAP に関する仮説

AAAP には、(1) アジア系アメリカ人の教育達成が高い、(2) アジア系アメリカ人では、出身階層と子どもの教育達成の関連が弱い、という 2 つの側面がある。戦前のアジア系アメリカ人の教育達成を予想する仮説として以下の 4 つを立てる。

1. セレクション。アジア系移民（親）は出身国のなかでも相対的に（観察できない要因も含めて）高い階層の者が多いゆえに、(1) (2) が生じる。
2. 選択的居住。アジア系アメリカ人は、アジア系移民・アジア系アメリカ人コミュニティのサイズが大きく、アジア系であることが高所得につながるような地域に多く居住していたために、(1) が生じる。
3. 文化の水平的伝達。戦前のアジア系移民はたしかに高階層であったが、その時点では教育達成のアドバンテージはなかった。こうした高階層移民が戦後に来た移民に対して高階層の文化を同じアジア系アメリカ人に伝達したことで、戦後に AAAP が生じた。したがって戦前には (1) も (2) も生じない。
 - 3.1. ただし、高階層のアジア系移民・アジア系アメリカ人が多く居住していた地域においては、(1) が生じる。
4. 文化の垂直的伝達。アジア系のなかでもとくに東アジアの儒教文化圏では、歴史的に、勉強や教育がそれ自体ステータスだとみなされてきた（e.g. 中国の科挙、日本の藩校や寺子屋）。その歴史的慣性のもとにある東アジアの出身者は、教育達成に高い価値を置いてきた。したがって、戦前にあっても、セレクションを考慮したとしてもなお、(1) (2) が生じる。
 - 4.1. 儒教文化を共有していないアジア系出身移民（フィリピン系移民）の子どもでは、(1) (2) は生じない。

本研究の特長は、セレクションと文化を二項対立として捉えるのではなく、いかに文化が伝播するのかという観点から説明を再考する点である。

方法

アメリカの 1930 年と 1940 年のセンサスのパネルデータ。1930 年時点で 8–18 歳の個人を

1940 年時点で 18–28 歳の個人とリンクしてパネルデータとしたもの。1930 年時点で測定された出身階層 (=親の学歴) および親の出身国が、1940 年時点で達成された個人の学歴といかに関連するのかを分析する。

従属変数：教育年数、高卒以上か否か (0/1)、大卒か否か² (0/1)

独立変数：

- 親のエスニシティ：以下のカテゴリ。

3+ Gen. White	子、親、親の親が White
3+ Gen. Hispanic	子、親、親の親が Hispanic
2nd Gen. White	子、親が White、親の親は非 White
2nd Gen. Hispanic	子、親が Hispanic、親の親は非 Hispanic
2nd Asian Americans	子はアメリカ出身、親はアジア出身
Chinese	子はアメリカ出身、親は中国出身
Japanese	子はアメリカ出身、親は日本出身
Korean	子はアメリカ出身、親は韓国 (朝鮮) 出身
Filipino	子はアメリカ出身、親はフィリピン出身

- 親の教育年数。実際の教育年数のほか、教育年数から出身国の平均教育年数を引いた相対教育年数も用いる。相対教育年数を用いたときにエスニシティの係数が小さくなるならば、その効果はセレクションによって生じているといえる。

統制変数：子年齢、性別、きょうだい数、家族人数、親年齢、母不在、父不在、親の職業、County

Table 1. Descriptive Statistics

	HSG (%)	BA (%)	Resp.	Years of Schooling			Selectivity Adjusted Education Rank	Female (%)	Sample Size
				(a) Parent	(b) Origin Society	(a)–(b) Diff.			
3+ Gen. Whites	49.5	7.4	10.5	8.8	8.7	.1	51.9	39.5	7,923,630
3+ Gen. Hispanics	21.8	2.4	7.8	5.1	8.7	–3.6	26.5	41.7	67,098
2nd Gen. Whites	42.0	5.2	10.3	5.3	4.4	.8	57.2	43.5	2,338,746
2nd Gen. Hispanics	16.0	1.3	7.4	3.6	2.5	1.0	57.3	43.6	74,816
2nd Gen. Asian Americans	71.3	10.1	11.7	7.9	5.3	2.6	70.0	42.0	19,130
Ethnic Groups of Asian Americans									
Chinese	58.6	13.5	11.3	4.7	1.6	3.1	70.9	44.2	1,438
Japanese	72.6	9.7	11.8	8.2	5.7	2.6	70.0	41.9	17,386
Korean	81.0	19.5	12.2	6.9	3.8	3.1	68.2	41.8	158
Filipino	37.8	7.1	10.2	5.4	3.0	2.4	65.7	40.5	148
Total	47.4	6.7	10.4	7.9	7.7	.3	53.0	40.5	10,423,420

Note: Average years of schooling in the origin society is from the Barro-Lee Educational Attainment Dataset (Barro and Lee 2013; Lee and Lee 2016). Selectivity-adjusted education rank is parental education rank in the country of origin.

結果

² 大学以上か否かを分析する際は 1940 年時点で 23–28 歳の対象者のみを分析に使用している。

Table 2. OLS and LPM Estimates of the Educational Achievement of Second-Generation Asian Americans Net of Parental Education

	Parental Years of Schooling			Selectivity Adjusted Parental Years of Schooling		
	Years of Schooling	HSG	BA	Years of Schooling	HSG	BA
(Ref. = 3+ Gen. Whites)						
3+ Gen. Hispanics	-.558*** (.013)	-.069*** (.002)	-.010*** (.002)	-.454*** (.014)	-.073*** (.002)	-.017*** (.003)
2nd Gen. Whites	.204*** (.002)	.014*** (.000)	.002*** (.000)	-.508*** (.002)	-.101*** (.000)	-.035*** (.000)
2nd Gen. Hispanics	-.694*** (.016)	-.123*** (.003)	-.022*** (.003)	-2.816*** (.012)	-.280*** (.001)	-.053*** (.001)
2nd Gen. Asian Americans	1.036*** (.015)	.195*** (.003)	.032*** (.004)	.639*** (.019)	.138*** (.004)	-.004 (.004)
Parents' Years of Schooling	.336*** (.000)	.045*** (.000)	.019*** (.000)	.338*** (.000)	.046*** (.000)	.019*** (.000)
× 3+ Gen. Hispanics	.122*** (.003)	-.009*** (.000)	-.012*** (.000)	.120*** (.003)	-.010*** (.000)	-.012*** (.000)
× 2nd Gen. Whites	-.197*** (.001)	-.021*** (.000)	-.012*** (.000)	-.193*** (.001)	-.021*** (.000)	-.012*** (.000)
× 2nd Gen. Hispanics	.018*** (.003)	-.022*** (.000)	-.016*** (.000)	-.003 (.003)	-.023*** (.000)	-.015*** (.000)
× 2nd Gen. Asian Americans	-.257*** (.004)	-.032*** (.001)	-.011*** (.001)	-.265*** (.004)	-.034*** (.001)	-.010*** (.001)
Constant	10.139*** (.001)	.423*** (.000)	.055*** (.000)	1.351*** (.001)	.451*** (.000)	.066*** (.000)
N	10,423,419	10,423,419	3,921,834	10,423,402	10,423,402	3,921,829
R-Squared	.325	.217	.121	.326	.217	.121

Note: Selectivity-adjusted parental years of schooling are parental years of schooling minus the average years of schooling of the country of origin. Control variables include respondent age, gender, sibling and family size, parents' age, no mother, no father, parents' detailed occupation, and county fixed effects. Standard errors are in parentheses. The total N is smaller than reported in Table 1 because perfectly collinear cases after the control of county fixed effects and parents' detailed occupation are dropped.

* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$; *** $p < 0.001$ (two-tailed tests).

表2の結果。変数は中心化しているので、主効果はそのまま全体の効果として解釈可能。

- アジア系移民の子どもの教育達成は最も高い（左上あたり）。
- 教育年数によるセレクションを考慮した場合、アジア系アメリカ人の係数は小さくなる。つまりアジア系アメリカ人は出身国のなかでも学歴の高い層である、ということによって、そのアドバンテージの一部を説明できる。しかし、それによって説明できるのは（教育年数の場合）3分の1にとどまる（右上あたり）。
- アジア系移民の子どもは、親の学歴の効果が最も小さい。すなわち、親の学歴によらず一様に教育達成が高いという傾向がある（左下あたり）。
- この傾向はセレクションによってはまったく説明できない（右下あたり）。

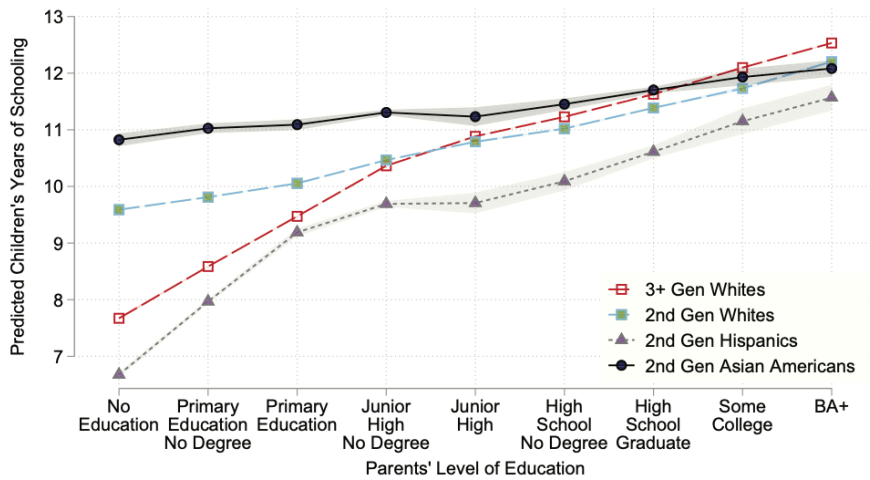
**Figure 1.** Predicted Years of Schooling for Second-Generation Asian Americans in 1940 by Parents' Levels of Education

Table 4. OLS and LPM Estimates of the Educational Achievement of Second-Generation Asian Americans by Ethnic Groups, Net of Parental Education

	Parental Years of Schooling			Selectivity Adjusted Parental Years of Schooling		
	Years of Schooling	HSG	BA	Years of Schooling	HSG	BA
(Ref. = 3+ Gen. Whites)						
2nd Gen. Chinese Americans	.664*** (.083)	.073*** (.015)	.062** (.024)	.111 (.087)	.001 (.016)	.023 (.019)
2nd Gen. Japanese Americans	1.066*** (.015)	.205*** (.003)	.027*** (.004)	.692*** (.019)	.151*** (.004)	-.006 (.004)
2nd Gen. Korean Americans	1.554*** (.158)	.301*** (.028)	.122 (.068)	.747*** (.221)	.176*** (.041)	.054 (.066)
2nd Gen. Filipino Americans	.040 (.258)	-.042 (.047)	.088 (.076)	-.813** (.272)	-.171*** (.043)	-.033 (.023)
Parents' Years of Schooling	.336*** (.000)	.045*** (.000)	.019*** (.000)	.338*** (.000)	.046*** (.000)	.019*** (.000)
× 2nd Gen. Chinese Americans	-.286*** (.015)	-.039*** (.003)	-.015*** (.004)	-.278*** (.015)	-.038*** (.003)	-.014*** (.004)
× 2nd Gen. Japanese Americans	-.262*** (.004)	-.034*** (.001)	-.010*** (.001)	-.264*** (.004)	-.034*** (.001)	-.010*** (.001)
× 2nd Gen. Korean Americans	-.191*** (.039)	-.023*** (.006)	-.006 (.015)	-.193*** (.037)	-.022*** (.006)	-.006 (.014)
× 2nd Gen. Filipino Americans	-.206** (.064)	-.026** (.009)	.005 (.013)	-.211*** (.063)	-.025** (.009)	.003 (.012)
N	10,423,419	10,423,419	3,921,834	10,423,402	10,423,402	3,921,829
R-Squared	.325	.217	.121	.326	.217	.121

Note: Control variables include respondent age, gender, number of siblings, family size, parents' age, absence of mother, absence of father, parents' detailed occupation, and county fixed effects. All variables except for parents' occupation and county fixed effects are grand-mean centered. Other groups are omitted from the table to save space as they are identical to Table 2. Standard errors are in parentheses. The total N is smaller than reported in Table 1 because perfectly collinear cases after the control of county fixed effects and parents' detailed occupation are dropped.
* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$; *** $p < 0.001$ (two-tailed tests).

表 4 の結果：

- 中国、日本、韓国系アメリカ人の教育達成は（White と比べて）高いが、フィリピン系にはそうした傾向は見られない（左上あたり）。
- セレクションを考慮しても、日本、韓国、中国系アメリカ人はフィリピン系アメリカ人と比べて教育達成はなお高い（右上あたり）。
- アジア系移民の子どもは共通して出身階層と教育達成の関連が弱く、やはりこうした結果はセレクションによってはまったく説明できない（下あたり）。

最後に、County レベルの特性によってアジア系アメリカ人の教育達成に違いが生じるかどうかを分析した結果（表 5）：

- アジア系アメリカ人における教育へのリターンが高いカウンティでは、むしろアジア系アメリカ人の教育達成は低い傾向がある。
- カウンティ内のアジア系人口の数やアジア系人口の割合の高さは、アジア系アメリカ人の教育達成に影響しないか、むしろ負の影響を持つ。
- カウンティ内の大卒アジア系人口の割合が高いと、アジア系アメリカ人はより大卒になりやすい。

以上の結果は、選択的居住よりは文化伝達の説明を支持する。

（そのほかにいろいろなロバストネスチェックをしている）

Table 5. Association between Educational Achievement of Second-Generation Asian Americans and Race-Specific Returns to Education in Local Labor Markets ($\beta_{ReturnEdu}$), Asian Population Size ($\ln(nASN)$), Proportion of Asians ($pASN$), and Proportion of Highly Educated Asians among Asian Americans (pBA_{ASN})

	$\beta_{ReturnEdu}$	$\ln(nASN)$	$pASN$	pBA_{ASN}
<i>Years of Schooling</i>				
Main Effect	.236*** (.057)			
× 2nd Gen. Asian Americans	-.290*** (.060)	.004 (.040)	.016 (.018)	.032** (.012)
N	10,423,419	10,423,419	10,423,419	10,423,419
R-Squared	.316	.316	.316	.316
<i>High School Graduation</i>				
Main Effect	-.005* (.002)			
× 2nd Gen. Asian Americans	-.004 (.006)	-.001 (.009)	.000 (.005)	.003 (.002)
N	10,423,419	10,423,419	10,423,419	10,423,402
R-Squared	.214	.214	.214	.214
<i>Bachelor's Degree</i>				
Main Effect	-.004** (.001)			
× 2nd Gen. Asian Americans	-.000 (.003)	-.009 (.006)	-.006** (.002)	.006** (.002)
N	3,921,834	3,921,834	3,921,834	3,921,834
R-Squared	.116	.116	.116	.116

Note: As the county fixed effects are controlled for, there is no main effect for $\ln(nASN)$, $pASN$, and pBA_{ASN} , which are constant within a county. The other control variables include respondent age, gender, number of siblings, family size, parents' age, absence of mother, absence of father, parental years of schooling, and parents' detailed occupation. Log total population size in the county and its interaction with groups are also controlled for. All variables except for parents' occupation and county fixed effects are grand-mean centered. Standard errors are in parentheses. The total N is smaller than reported in Table 1 because perfectly collinear cases after the control of county fixed effects and parents' detailed occupation are dropped.

* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$; *** $p < 0.001$ (two-tailed tests).

結論

結果のまとめ

- AAAP は新しい現象ではなく、戦前からすでに存在した。
- アジア系アメリカ人の教育達成の高さの一部のうち（教育年数および観察可能な属性による）セレクションによって説明できるのは3分の1程度である。
- これは選択的居住（コミュニティ特性）によってはほとんど説明できない。ただし、大卒アジア系アメリカ人の多い地域ではアジア系アメリカ人が大卒になりやすいという関係は見られた。
- アジア系アメリカ人においては出身階層と教育達成の関連は弱く、これはセレクションによってはまったく説明できない。

- アジア系アメリカ人のうち、高い教育達成を示すのは中国、日本、韓国系アメリカ人であり、フィリピン系アメリカ人では観察されない。

分析結果は概して、文化による説明——歴史的に形成された東アジアの文化が移住先国に持ち込まれることによって、子どもの高い教育達成、あるいは階層によらず高い教育達成につながる傾向を生み出している——を支持するものである。

ただし、ここでの説明は文化本質論を志向するものではない。文化は歴史的に形成され、それが持ち込まれて普及することでその効力を発揮する（大卒アジア系人口が多い地域ではアジア系アメリカ人が大卒になりやすいといったように）。さらに、はじめに高階層の移民が流入し、同じ地域の出身者に階層文化を普及するといったように、セレクション vs 文化という二項対立ではなく、相互補完的な説明を目指すべきである。

限界

- 18-28 歳までを分析対象としたため、遅い年齢で学校に行く層の存在を考慮できていない
- 子どもの高い教育達成を実現できなかった移民が帰国しているという可能性（起こりにくいと思われるが）を排除できていない
- セレクションの測定に使用した出身国の学歴分布が移民したタイミングと異なっている可能性がある。
- セレクションに影響する他の要因（野心など）を考慮できていない。
- フィリピン系移民と東アジア系移民の間には文化以外の何らかの違い（移住に至った経緯など）があるかもしれない。
- 具体的にどのような東アジアの文化が教育達成に寄与しているのかはわからない。
- 他に教育達成の高い移民の子ども（たとえばユダヤ系アメリカ人など）はどのような要因でそうなっているのかはわからない。

コメント

- 事例の選択の仕方を理論的動機にもとづいて説明することによって、アジア系アメリカ人の研究に対してではなく（この場合には、戦後については研究されているが、戦前については研究されていない。そこで本研究では……という導入になるだろう）、社会学一般に対して貢献するものだという立ち位置を明確にしている点がとても優れている。
- 実際に文化が影響しているということを直接検証しているわけではないが、たとえばフィリピン系との比較を文化が原因だということの説得性を高めるために用いられており、比較の理論的位置づけ方がうまい（平凡な論文なら、アジア系といって

- も色々いるから分けてみてみよう、というだけで終わってしまいそうなところ)。
- また、これも実際に検証しているわけではないが、既存の議論をフレーミングし直し、新しい理論的な見方を提示して、それにもとづいて結果を解釈しているところも説得力がある。
 - 細かくみると微妙なところがないわけではない。たとえば、フィリピン系アメリカ人でも出身階層と教育達成の関連は弱いのはなぜなのかあまり説明されていなかったり、東アジアの文化が出身国においてどの階層にも浸透していたのかについてはあまり説明されていなかったりする。たとえば、江戸時代には寺子屋に行く町人は一定数いたと思われるが、人口の大多数を占めていた農民は行っていなかったと思われる。農民層出身者はそもそもアメリカに移住しないかもしれない。したがって東アジアの文化というよりは東アジアの高階層の文化なのかもしれない。
 - しかしながら総じて、分析の目新しさではなく、理論的な貢献によって論文のインパクトを高めているというところに感銘を受けた。